

【銀賞】

『祖父の手紙』

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校 3年 甲斐 創太朗

「お礼の電話、ちゃんとときなさいよ。」そう母はせつつかれやっとな電話に手を伸ばす。

「あ、もしもし、おじいちゃん？創太朗。お米、ありがとう。」

「ええよ。それより学校うまくやってるか。」

「うん、この間ね。」少し学校の話題をして、電話を切った。最近、お礼の電話すら母から言われなければしなくなった。祖父からしてみれば心待ちにしている電話なのに。

僕の祖父は宮崎県日之影町に住んでいる。土地の九割が森林という日之影町は、農林業が盛んで、森林を活かした「森林セラピー」などにも取り組む、山間の静かな町だ。祖父も日之影の農林業を支える一人で、米や野菜を作っている。そして、いつも自家製のお米を僕の家を送ってくれるのだ。おかげで我が家は買わずともおいしいお米を毎日食べられる。しかし、当たり前だからこそ慣れてきて、祖父の手作りのお米のありがたみが薄れてしまっていた。お米が届いても、お礼の電話すら自分からしようとせず、母に言われてからやっとな電話する始末だ。

中学二年の冬、僕は風邪を引いて寝込んでいた。寝込んで二日目。

「これ、じいちゃんから。」そう言っただけから渡されたのは、お金と短い手紙だった。

「体調は大丈夫ですか。お米と野菜を送っておきました。たくさん食べて元気になってください。」

茶封筒に入った簡潔な手紙。じいちゃん、僕が具合が悪いつて知ってたんだ。祖父の思いが心に染みわたった。それと同時に、いつも祖父が僕のことを気にしてくれていること、祖父や祖父のお米が僕を支えてくれていたことが確かなものとして伝わってきた。

その出来事以降、祖父への感謝の電話は欠かすことはなかった。そして、祖父のお米の味もいつそうおいしく感じられるようになった。僕と祖父の心を更に深く繋いでくれたお米。日之影のお米についてもっと知りたいと思い、調べてみることにした。

調べてみると「合鴨農法」というものが盛んだと分かった。祖父が以前していたもので鴨は水を張った田んぼを泳ぎながら、雑草を食べたり土を混ぜてくれたりとメリットがいっぱいだ。この合鴨米、近年話題のふるさと納税の人気商品だったようで、完売していた。

祖父のお米は品種にも特徴がある。ヒノヒカリだ。このお米は宮崎県で開発され、低コストながら良質の味と粒の厚さが自慢で、作付面積は全国三位を誇る。これまで毎日食べてきた日之影の祖父のお米だったが、知らないことがまだまだあったことに驚いた。

しかし、問題点があることも分かった。それは全国的に問題でもある「農業の担い手高齢化」である。他の地域よりも日之影はより深刻で、住民の二人に一人が六十五歳以上のだという。僕の祖父も七十三歳と高齢だ。僕は、僕ら家族を支えてくれるお米の育つ日之影の農業を廃れさせたくない。あの大好きなお米を守りたい。産地が違いこそすれ、全国の人がそれぞれ地域のお米に寄せる思いは同じだと思う。「僕の日之影のお米」に当たるものが人それぞれにあるはずだ。

今、高齢化により危機的状況に陥りつつあるお米。私たちは身近すぎてつい忘れてしまいがちお米のありがたみをもっと知るべきだと思う。そしてお米に感謝の心もち、大切にしていかなければならないのではないか。

祖父の手紙は、祖父の思いだけでなく、お米について改めて深く考える機会をくれた。僕を支えてくれるお米をこれからも大切にしていこうと思う。